
世界樹と精霊

チェルシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界樹と精霊

【Nコード】

N6586T

【作者名】

チエルシー

【あらすじ】

長い間人間と関わらず、沈黙を守り続けた《精霊》にある出会いが訪れる。そして……

プロローグ

地球が有るこの世界とは別の世界………異世界。

その異世界で一番広い森：【初まりの森】の丁度真ん中に【世界樹】と人々に呼ばれ、神聖視されている巨大な木が存在している。

その木の大きさは、直径約5メートル・高さ約75メートル。その木の周辺に生えている木もそこいらの木とは比べ物にならないほど立派なものだが、この【世界樹】は別格。

普通の木では有り得ない程の凄まじい存在感を周囲に放っている。

そして、大きさだけでなく、姿も他の木と比べ物にならない程の美しさだ。

長い時を生きてきたであろう幹は、ザラザラとしている他の木とは違い、滑らかで、明るい茶色をしている。滑らかと言っても、さるすべりと言う木とは違い、皮がむけているように見える訳ではない。

その木には淡い燐光を放つ若草色の葉が木の枝をしつかりと覆っており、その葉と葉の間から漏れる光が、野に咲き乱れる野花達を優しく照らしている。

そんな木のすぐ隣には、世界一の透明度を誇る湖【リーティア湖】が太陽の光を反射して、キラキラと輝いている。

世界の名だたる芸術家達が『見なければ死んでも死にきれない』と

言わしめるほどの風景が広がるこの場所は、芸術家で無くとも『死ぬまでには一度見てみたい』と人々が言う神秘の場所。

しかし、この場に近づく事は困難を極める。

森の中に有るからという訳ではない。

【世界樹】を中心とした半径30キロに結界が張られているためだ。

この結界、【世界樹】がこの地に芽吹いた時から宿っている《精霊》の様な存在が結界を張っている。

言ってしまうえば、この【世界樹】だが、根元から木の中に入れる様になっている場所が有り、その中に守られるようにして有る《木の核》とも言える宝石が有り、そこに《精霊》の様な存在が宿っている。

その、核とも言える宝石に宿った《精霊の力》で【世界樹】を始めとした【初まりの森】は保っている。

この宝石がこの森から持ち出されてしまった場合、この【世界樹】中心にどんと枯れて行ってしまう。森に流れる川や、森の周辺に有る地下水源も枯れ果てる。

【初まりの森】が枯れてしまったら、この森を糧に生活していた人間達は死。

【初まりの森】が有るからこそ、国が多く存在しているこの世界では、森の死は、人々の死へと直結する。

しかし、この《精霊が宿る宝石》は、人間で知る者は居ない。

知られなくても、この世界の生き物たちを裏から支える《精霊》は存在している。

そして、《精霊》の力の影響で、【世界樹】の周囲に生息している野生の生き物たちにはいろいろな変化が起きたモノ達が居る。その動物達には自我が有り【世界樹】の《精霊》に付き従っている。

やはり、この事も人間で知っている者は居ない。

『平和だね』

ちなみにこの透き通るような声が【世界樹】の《精霊》の声だ。

この精霊にもしっかりと自我が存在している。

しかも、昼寝好き。

気付いたら数年間寝ていた、なんて事がざるに有る困った《精霊》だ。下手すると数十年眠っている事も有る。

性別的に言くと女性。人型にも成れるらしいが、必要になる事がま
ず無いので、見たモノは居ないらしい。

《そうだね》《そう？今日は鳥達が飛びまわっているから騒がしい》
《《そろそろ産卵の時季だからだよ》《そうだった？》《うん。今鳥達は巣を作っているんだよ》《そっか》《そうなんだ》《多分ね》
《《……多分ねって》《長生きしていると時間の経過が分からなくなってくるんだもん》《それもそうね》《それには賛同》《気にし

たら負け》《それにも賛同》

この響くような声は、長年《精霊の力》の中心地で生きてきた事により、自我を持った木達だ。

様々な木達は、良くこうした会話を《精霊》としている。

逆に言えば、木達とその他の例外しか話し相手が居ないのだ《精霊》には。

たまに人間がこの森の中へ入って来る事もあるが、その人間達の前では絶対に声を出さない。

他の木達も同様に。

ちなみに、何故結界が有るのに人間が入れるのかと言うと、この森に入るには《条件》が有るのだ。

この条件は一つしかなく、簡単に言えばこの条件を満たしていれば誰でも結界を通り抜けられる。

その条件は『結界内に入るのを意識しない事』だ。

大抵悪い事目的で入って来る人間は、目的がある訳だから《森に入る》と言う事意識しない様にしても、してしまうものだ。

だから、邪^{よこ}まな思惑で入ろうとする者は、決して入れない。

入って来る人間は大抵へ入るつもりはなかったが、いつの間にか入っていた」と言う人間ばかりだ。

それでも、この森の存在を知らない人間は、この森の周辺に有る国で知らない者は居ないので、人間が入ってくるのは1年に1回入ってくるか来ないか位だ。

だからこそ、この森は平和が保たれている。

そして、この広大な森【世界樹】を含めた全ての【母】とも言える《精霊》

もう、大昔から存在し、長い間沈黙を守り続けていたこの《精霊》に有る【2人の人間】との出会いが訪れる。

《精霊》が人々に知られる存在となる出会いが。

『平和すぎて眠いから、少しの間寝るね。何かあったらよろしく』

《また寝るの?》《寝るの?》《せっかく起きたばかりなのに》《いつ起きたんだっけ?》《……………4日前?》《そうだっけ?》《多分》《また多分?》《別に何年寝ても何も変わり映えしないんだし良いんじゃない?》《そう言うもん?》《そんなもん》《そうか》《そうだね》《ふふふふふ》《ははははは》

木々達の笑い声を聞きながら《精霊》は、また長い眠りに落ちる。

次に目覚めた時、起きる出来事を知りもせず

第一話 目覚めたら…（前書き）

自分の浮気性！

治せないものか……

次々と新しい話を書きたくなくて、書いてしまう……

直せないものだろうか……

第一話 目覚めたら……

《……人……》《……赤……血？……》《どう……》《精れ
……おこ……》《でも……かな……？》《わ……無い……》《ど
……しよ……か……》《別に……へ……き……じゃ……》《人……も……いよ……》
《早……いと……》《で……》《どうし……》

森の木々達がざわめいている。

所々聞こえていた木々達の声に、何だろうと、眠っていた《精霊》は意識を覚醒させる。

すると精霊が起きた事に気付いた木々達は、何処となく慌てた様子で、一斉に《精霊》『だけ』に向かって話し出す。

《よかった！》 《起きたんだ》 《ねえねえ》 《人間だよ》
《久しぶりに、人間がここまで来た》 《でもあの人間、沢山赤い液体が体から出てる》 《確か血って言うんだよね？》 《私達にとって樹液的なやつでしょ？》 《しかもなんだか苦しそう》 《こうゆう時ってどうするの？》 《助ける？》 《治す》 《どうやって？》 《どうしよう》 《だから大丈夫じゃない？》 《人間は脆いってさつきから言ってるじゃん》 《でも》 《どうしよう？》 《このままだと死んじゃう？》 《うーん》 《多分》 《多分？》 《そんな事言ってる場合？》 《さあ？》 《どうしよう？》 《少し落ち着け》 《でも》 《お前、でもばっかだな》

色々関係無い事を省いて、分かりやすく言つところだ。

人間が来ていて、しかもけっこうな怪我をしているらしい。

取りあえず、その人間は何処に居るのかと《精霊》は当たりの気配を探ると【世界樹】の根元に居る事が分かり、その場所を見定める。

「……………くうっ……………」

そこには、苦しそうに息をしている青年が、倒れこむようにして【世界樹】に寄りかかっていた。

本当は綺麗だろう群青色の髪は血と泥にまみれ、瞳の色は閉じられていて分からない。

苦痛のために歪んでいる顔も、髪と同じように血と泥で汚れているため、良く分からない。

そして、分かるのはその腹部に、かなり大きい獣か魔物にやられたのが分かる、大きな三本の引っ掻き傷が有る事だ。

服の上からざっくりやられたのだろうその傷は、かなり深く、赤い血がドクドクと流れ続けている。

早く血を止めなければ命にかかわる。

『これはちよっと危ないわ』

《精霊》は厳しい声で告げる。

《ちよっとって?》《どのくらい?》《死んじゃう?》《結構出てるし…》《何が?》《血》《顔真っ青だし?》《うん》《死んじゃ

う?》

木々達の声に苦笑する様に少し声をもらし、ちょっと困ったような声で言う。

『治すと言っても、私は人間を治療した事が無いの』

その言葉を聞いた木々達は、それなら平気だと言って騒ぎ出す。

《ロウとかと同じ様にすれば良いんじゃない?》 《形が違ってても、中身は同じでしょ?》 《血って言うんだっけ?》 《ロウ達も同じ》 《そう言えばそうだ》 《ロウ達の一族なら治療した事有ったでしょ》 《あったっけ?》 《結構前だけどあったよ》

木々達が口々に言っているロウと言うのは【世界樹】の影響で、他の動物達や魔獣達とは違う進化を果たした、この世界では神獣と言われる者たちの中の一族の一つ。

【ボルトウルフ】一族の長である。

この一族は、この森隅々までの監視を行っている一族であり、今現在は一族総出でなければ間に合わない程の事態が起き、森を空けている。

《精霊》が眠りに落ちている時、そう伝言を残していたのだ。詳しい状況の報告とともに。

『……………じゃあいけるかしら?』

でも“この力”人間には強すぎると思うのよね……………人型になれば、力のいくらかは抑えられるかな?』

《精霊》がそう言って少し経つと【世界樹】が眩い光を放つ。

そして、その光が収まった時には【世界樹】前に、美しい女性が立っていた

歳は、見た目で言うと二十歳くらい。体の線は全体的に細いが、胸はたわわに実っていて、腰も世間の女性達が羨ましがるだろうほど細い。

透き通るような肌は、乳白色している。光の当たる角度によって色を変えキラキラと輝く真つ白な髪は地面にとどきそうなほど長い。

そして、顔は見た者は皆、女神だと勘違いしてしまいそうなほど整っている。瞳の色は琥珀色。

この琥珀色は《精霊の宝石》と同じ色である。

その姿は神々しく、威厳に満ちており、森の女王とでも言えるのではないだろうか。

木々達が《初めて見た》と言いいい、ざわめいているのを気にも止めず、《精霊》は、その青年の近くまで近づいて行く。

歩いて近づくのではなく、空中を滑るように近づいて行く。足は地面に付いていない。

そして、青年のすぐ隣までやってくると、傷の上に手をかざす。

『これでいけるかしら?』

そうポツリと呟いた次の瞬間、かざした手が光り始める。

そしてその光は、傷を柔らかく包み込む。

少しすると、傷から流れ続けていた血が止まり、傷がピンク色になる所まで回復する。

苦しげだった青年の顔も、穏やかなものとなり、荒く乱れていた呼吸も規制正しくなった。

そこまですると《精霊》は力を注ぐのをやめる。

『これ以上は逆に良くないわ。』

流石に、流れてしまった血を戻せる訳ではないから、少し休ませてあげましょう。

体力さえ戻ればなんとかなるわ』

《良かった》 《止まった》 《樹液?》 《違うよ、血だよ》

《治った?》 《多分》 《多分?》 《このまま目を覚まさなかったら》 《そんなの有リ?》 《有り》 《…て言うか》 《何

?》 《何い?》 《何でこの人怪我してたんだろう?》 《そりや…襲われたから?》 《誰に?》 《誰って言うか…獣か魔獣》

《多分魔獣だよ》 《この辺りは魔獣多いからね》 《でもこの人かなり強いよ。だから獣では無いと思うし、魔獣でも結構強い奴じゃないと、こんなにはやられないと思う》

何か知っている様に言う、一本の木に向かって《精霊》は問いかけ

る。

『この人の事知っているの?』

《ううん、知らないよ。

でも仲の良い小鳥が良く話してくれるんだ。最近若い人間で、凄
珍しく強いのが居るよって。

その小鳥は、人間達の国に良く行って、色んな事を見て来るのが好
きなんだ。

その小鳥が言ってた若い人間の特徴がその人に似てる。多分だけど
間違いないよ》

『……じゃあ、ロウ達が討伐に行った亜種の魔獣に関係が有るのか
しら?』

《なあに?》《どうかした?》

『いえ、何でもない』

最後に《精霊》が小さな声でポツリと言ったこの言葉、聞こえたモ
ノはいなかったようだ。

そして、《精霊》が何か青年の様子の変和感に気付いた様で、青年
の額に触れる。すると少し驚いた様に言う。

『この人、少し熱が有るみたい』

《熱?》 《えっと、そう言う時は…》 《やっぱ冷やす?》
《そうだね》 《お水!お水!》 《と言うか、水飲ませた方が良
いんじゃない?》 《確かにそうだね》 《でも意識ないよ》 《…

無理やり?」 《ねじ込む》 《そんな言葉どこで覚えた》 《前
に来た人間の言葉の中》 《……》

その後も、木々達の騒がしい声を聞きながら《精霊》は、青年の看
病するのであった。

第二話 初めて・・・

「……………っ」

そう呻き声を上げて青年は眼を覚ました。

ぐらぐらと揺れる頭をこらえて、自分が居たらしい穴から顔を出し、青年は周囲を見回す。

目の前に映るのは今までで見た事とない程美しい湖、一本一本が今まで見た木より一回りは大きい木々。

そして、その大地には見た事の無い美しい野花が咲き誇っていた。

風に吹かれて揺れる一つ一つの野花や木々瑞々しい葉が、光を反射して輝いている。

どこことなく神聖な雰囲気が漂う場所を目の当たりにした青年は驚きで眼を見開き呆然となる。

「……………ここは一体……………？」

何処だ？

そう思った瞬間、意識を失う前に自分に起こった事が頭の中でよみがえる。

青年は、最近現れ村や町を荒し回ってる魔獣を討伐するための任務に参加していた。

今回の魔獣は何かしらで変異を起こした亜種、しかもこの変異した亜種はかなりの数の魔獣を引きつれており、しかもこれがかなりの強さらしく、その地域の衛兵では数的にも、強さ的にも歯が立たず《被害が広がる前に即急に対処を》との事で、軍の中でも飛び抜けて優秀な者が集められ、一時的に討伐部隊が作られた。

青年は最年少で選ばれた。

青年は、軍の中でも上位の戦闘力を誇り、この若さでこんなにも強いことから将来が楽しみだと言われていた。

青年は言われている事に気付いていないが。

そして青年を含む討伐部隊は、村を襲っていた魔獣達をあらかじめたずけた後、討伐部隊は頭で有る亜種を探すため、数が多く、斃しきれなかった魔獣十数匹が逃げ込んだ森の中に入った。

逃げて行った魔獣は、同じ方向を目指しているようであり、この先に亜種が居ると確信した部隊は痕跡を追って森の中を奥深くまで入

って行つた。

そして亜種の魔獣を見つけた。

しかし、その周りには魔獣が数匹いるだけで、逃げて行つた魔獣とあの場所にはいなかった魔獣達がかなり居ると思つていた隊員達は少し戸惑い気味だったが、斃すことには変わりがなく、頭を切り替えると戦闘を始めた。

先鋭とも言える部隊と言う事と数が少なかった事も有り、意外なほどあっさりと勝負がついた。

亜種との戦いは、さすがにてこずると部隊の者全員が思つていたが、何故か亜種は弱つていた。

そのおかげであっさり勝負がついたのだ。

色々な疑問が残る事になったが、取りあえず王都に帰還と言う事になり来た道に戻るうした時、殺し切れていなかったらしい魔獣が飛びかかって来た。

普通だつたらあっさり返り討ちに出来たのだろうが、魔獣が飛びかかった者は隊の者ではあるが戦える者では無かった。

軍医だつたのだ。

単独で動く任務を請け負つた部隊には数人の軍医が付く事が多い。

今回の討伐部隊も例外ではなく2人の軍医が付いて来ていた。

もう殲滅したと思っていたため、隠れていた軍医も出て来ていたのだ。

青年はとっさ軍医をに庇った。

その勢いで魔獣と共に流れの速い川に落ちたのだ。

丁度前日に激しい雨が降っていた事も有り、元から水量が多く、流れの速い川はますます水量が多くなり流れの速さも速くなっていた。

冷たい水の感触と薄れる意識……そしてあたりが真っ暗になる。

眼を醒ましたのはどこか流れ着いた場所。

体はまだ下半身は川の中だ。ざつくりと魔獣にやられた傷からは血がどんどん川の水にさらわれていく。

痛みと血が足りないせいか、視点も定まらない。

力の入らない手足を無理やり動かし、這って行った。

何処に行こうとか、移動しようとか思った訳では無かった。

だが、此のままではまずいと頭のすみで警鐘がなっていた。

無意識にその警鐘に従い5メートルほど移動した所で青年は力尽き、手足をピクリとも動かせなくなり自分は死ぬのだと分かった。

血はいまだに流れ続け、顔は真っ青。

生きているのが不思議なほどの重症だ。

意識は朦朧とし、周囲は霧がかった様にしか見えず動いているのか居ないのかが分かる程度。

不思議と青年の心には恐怖心は無かった。

受け入れようと。

自分の死を。

そう思っていた。

眼を開け続ける事も出来ず、眼を閉じた。

闇に包まれ、もういいと。

そんな時、

目の前に光が現れた。

光の正体は分からない。

しかし優しいその光は優しく青年を包み込んだ。

小さい頃母に抱かれて眠った時の不思議な安心感を覚え、青年は意識を手放した。

「……思い出した」

あの時青年は死ぬはずだった。

上位の治癒魔法を使える医者で無ければ助からなかったであろう傷だったのだ。

とっさに青年は傷が有るであろう場所を見る。

「……………ッ!？」

傷は跡こそ少しは残るだろうが、塞がっていた。

あんなにもは深かった傷だというのに。

「どう……………いう事だ……………?」

何が何だか分からなくなり、混乱している所に行き成り澄んだ声がかかる。

『あら? 眼が覚めたのね』

「誰だっつ！」

突然の事に、とっさに真横に置いてあった自分の剣をつかみ声のした方に振り向きざまに構える。

『ふふふ、大丈夫よ何も悪い事はしないわ』

青年は息をするのを忘れたかのように呆然と固まった。

『ねえ、貴方の名前を私に教えてくれない？』

これが、人間と《精霊》との初めて邂逅^{かいこう}。

十年後には世界最強と呼ばれるようになる青年と世界の中心で生きるモノすべて支え続ける《精霊》との出会いであった……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6586t/>

世界樹と精霊

2011年8月10日02時51分発行